

スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ著、三浦みどり訳  
『戦争は女の顔をしていない』 群像社、2008年

「分かる」ことの失敗を通して得られること

後藤正憲

学生時代からもう随分長くロシアと付き合いながら、これだけはどうしても馴染めそうにないと思えるものが二つある。一つはウォッカ。ロシア人を相手に、調子を合わせて飲んでみると、仕舞いには必ず失敗する。どだい日本人はロシア人に比べて生理的にアルコール許容度が低いのだから仕方がない。これは「身体」の問題である。

もう一つはロシア人の戦争観だ。毎年、ドイツ降伏を記念する5月9日が近づくと、人々は互いに「勝利」を祝福してキスを交わす。街に掲げられた横断幕や広告には「勝利」の文字が躍り、テレビ局は戦争や軍隊の特集番組を競って放映する。記念日当日、運悪くパレードに巻き込まれて「ウラー！」の喊声に包まれようものなら、まるで塩をかけられたナメクジのように、自分がその場に消えてなくなってしまいそうな感覚に陥る。「勝利」を無条件で称揚する「社会」を前にして、「身体」は全く場所を失ってしまう。

日本でも「勝ち組」とか「負け組」とかいう言葉をまるで重大な意味があるかのように口にする人の前では、似たような疎外感を感じることもある。だがその場合、そんなものはスポーツやゲームの原則を人の生き様に当てはめる幼稚な比喩だと反論することができるだろう。しかし、ことロシア人の戦争観に関しては、「社会」によって「勝利」が歴史的重みを与えられているだけに、その圧倒的な力に意気阻喪してしまうのである。

今回ご紹介するスヴェトラナ・アレクシエーヴィチのインタビュー集、『戦争は女の顔をしていない』は、こうした「社会」による戦争観の支配を、第二次世界大戦に従軍した女性たちの証言を通して打開しようとする。女性が家庭の外で男性に交じって職業を持つことが一般化していたソ連では、多くの女性が兵士として戦場に向かった。この本では、10代後半から20代前半の多感な年頃に従軍した女性たちの声が、三浦みどり氏の巧みな翻訳と相まって、戦場のリアリティーを再現している。それはアレクシエーヴィチが言うように、「私たちは勝利した」という「単純な公式」に収まりきるようなものではない(p.58)。

証言者の語る内容は、生々しいほど「身体的」だ。頻繁に行われる手足の切断、周囲に充満する死体や血の臭い、人間を苛む飢え、ゲシュタポによる拷問…。語りの一つ一つが明かす「身体」の具体性が、「社会」という曖昧さの覆いから戦争の現実を解き放っていく。

あまりの衝撃に固唾をのみながら読み進むうち、「これほどの犠牲があったのだから勝利に対するロシア人のあのこだわりようも分かるような気がするな」と考えている自分にふと気付いた。次の瞬間、ぶるぶるっ！と頭を振って思い直す。彼女たちの体験した苦悩の、一体何が自分に「分かる」というのか？ もし仮にそれが「分かった」として、そのことが今日における人々の「勝利」に対するこだわりと、どのようにつながっていると「分かる」のか？ 私にとって「分かる」ことは、やはり失敗に終わるしかない。

見方を変えれば、アレクシエーヴィチのこの本自体が「分かる」ことの失敗を積み重ね

ることによってできたと言える。1985年に出された初版では、全317ページの冒頭48ページにわたって、インタビューを受けた女性の肖像写真が掲載されていた。その多くは軍装の勇ましい姿だが、中には戦争と全く切り離された日常の顔を切り取ったものもある(群像社の日本語版表紙に散りばめられた写真はその一部)。ところが、その後2004年に加筆修正して再版された本からは、肖像写真がそっくり取り除かれている。その経緯については一切触れられていないが、初版はすでに出回っていたのだから、まずプライバシーを考慮してのことだとは考えにくい。それに本のタイトルが暗示しているように、作者が「人間の顔を持つ」物語を紡ぎ出そうとしていたことを考えると、写真の削除はまるで矛盾している。人の個性を最もよく表わす身体部位である顔を見せることで、それまで「社会」の匿名性に埋もれていた人間的な真実を明らかにしようとするからこそ、本の目的だったはずだ。しかしアレクシエーヴィチは、その回想部分で正直に白状するように、理解しようとするほど人間の内にある「理解しがたい暗いもの」(p.128)の存在に気づかされる。そしてその「理解しがたい」内部を表すには、顔写真はまるで役割を果たさないとも言えるように、あっさり切り捨ててしまうのである。

実は、人間の顔はその人の内奥に通じる表面などではなく、常に内面との間に亀裂を生じているものなのではないか。興味深いことに、証言の中の衣服にまつわるエピソードが、このことを分かりやすく示している。なるほど衣服は顔と違って、簡単に着脱可能である。しかし、両者はともに自己と身の回りの世界、言い換えれば「身体」と「社会」が接する境界にあって、人に自己を強く意識させるという点で共通している。軍隊という全く異次元の世界に足を踏み入れた女性たちは、身体と衣服のズレにたびたび悩まされていた。このことは、彼女たちの証言の端々に現れている。例えば、自分の足に合わない男物の軍靴を引きずって歩くことの惨めさ——「本当に辛く、みっともないこと！ほんとにぶざまだった！」(p.94)。窮屈な軍外套や、血が乾いて固くなったズボンが皮膚に擦れることによる痛み——「軍外套がどんなに擦れて痛いか想像できないでしょう？何もかもがとっても重かった」(p.230)。また戦争が終わって、軍服を脱ぐ際の戸惑い——「初めてワンピースを着たときには涙にくれたものよ。鏡を見ても自分だと思えなかった」(p.149)。

衣服と同様に、顔は自らの思い描く己の姿とズレを生じ得る。死と隣り合わせにある戦場で、「殺された時にみっともなく倒れているなんてどうしてもいやだった」という女性は、こう語る。「機銃掃射を受けた時も、殺されたくないと思うより、とにかく顔を隠したものよ。女の子はみなそうだったと思うわ」(p.194)。

この女性のように、死ぬことよりむしろ醜い姿をさらすことを恐れるのは、しかし何も特別なことではないのかもしれない。私たちが普段、強く人の眼に惹きつけられておきながら、いざ視線がぶつかった時ついこちらの眼を伏せてしまうのは、相手の瞳に映った自分の顔が、自らの思い描く像と違っていることに対する恐怖があるからではないか。人は自分の顔が自分本来のものであり、自己存在の現れであることを信じて疑わないが、決して自分の顔を直接見ることはできず、他人がそれをどのように見ているかということを通して確認するしかないという不安定さを同時に抱えている。鏡を見る場合でも、人の目

に映っていると想像される像を見るのであって、決して「ありのままの」顔を直接、無媒介に見るわけではない。それゆえ、普通考えられているように、人間の「素顔」が最もピュアな人となりを表わすというよりも、むしろ「素顔という仮面」がふとしたきっかけで、まるで重い軍外套のように、自らの皮膚と擦れて傷を生むことだってあり得るのではないか (cf. 鷲田清一『顔の現象学』講談社学術文庫、1998年)。

その端的な例が写真だろう。写真は、凝固した顔とその奥にある人となり的一致して重なるように見せることで、多様な表情の現われを封じ込めてしまう。初版で女性の肖像写真を掲載した後、おそらくアレクシエーヴィチもぶるぶるっ！と頭を振って思い直したのではないだろうか。戦争は女の顔をしていない。しかし女の顔をしてはいけないと\*。

視覚の対象として顔を想定する限り、「人間の顔を持つ」物語は失敗せざるを得ない。しかし、その失敗によってできたほころび——顔と自分とのすき間——から、目で見ることのできない新たな存在感を持った「顔」が現れる。この本が制作された当初の思惑とは異なる場面で、いたるところに現れる証言者のこの「顔」こそ、一掴みに「分かる」ことの失敗を通して見出されることが可能となった、貴重な産物である。

\* この点で、2008年にモスクワで制作された映画『戦争の女の顔、カチューシャ』(監督アレクセイ・キタイツェフ)は、アレクシエーヴィチが脱神話化した戦争のイメージを再神話化するものだとする前田氏の指摘は的を得た意見だと思う(前田しほ「証言という文学—スヴェトラナ・アレクシエーヴィチによる戦争神話の解体」非常勤研究員セミナー、2009年12月7日)。なお当セミナーの発表が、この書評を書く起点となったことをお断りしておく。

後藤正憲 (ごとう まさのり)

北海道大学スラブ研究センター特任研究員。専門は文化人類学。研究テーマは、ヴォルガ中流域諸民族の宗教その他の文化的実践。